

資 料

## 文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念

太田美緒<sup>1)</sup>, 前田樹海<sup>2)</sup>

【要 旨】 文部科学省の「看護学教育の在り方に関する検討会」は、看護実践能力育成におけるロールモデルの有用性を示している。しかしながら、看護分野において、ロールモデルに対する共通概念が浸透しているとはいえない。そこで、看護教育に関連のあるロールモデルについて、過去の論文を検討した結果、ロールモデルに、1) 人物、2) 生存する、3) 身近な存在、4) 目上、5) 看護関係者、などの条件が課されており、受け手が自由に決めてよいはずのロールモデルが、狭い枠組みの中で捉えられていることが判明した。また、ロールモデルの決定者は看護学生や新人看護職者ではなく、研究者や教育者であった。さらに、看護教育におけるロールモデルは、看護学生等の教育手段としてではなく、むしろ研究者の考える理想像に、教育的立場となりうる人物を近づけるための教育的手段として考えられていた。

【キーワード】 ロールモデル、看護教育、概念

### 緒 言

深刻な看護職人材不足が社会的問題として取り上げられて久しい。昨今では特に、今後の看護を担う新卒看護職員の離職率の高さが問題視されている。日本看護協会（2006）の「2005年病院における看護職員需給状況調査」によると、新卒看護職員の就業後1年以内の離職率は2003年度、2004年度とも9.3%であることが報告されている。また、日本看護協会（2005）の「2004年新卒看護職員の早期離職等実態調査」では、「新卒看護職員の職場定着を困難にしている要因」として、「基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップ」をあげており、新卒看護職員自身と職場の双方が看護基礎教育における看護実践能力育成の不十分さを認識しているといえる。

大学教育も例外ではなく、文部科学省（2002）の平成14年看護学教育の在り方に関する検討会（以下、

検討会と略す）において、大学卒業者の看護実践能力の向上、およびそれら基礎能力の育成を確実に行うための教育内容の整備の必要性が強調され、看護実践能力の育成は、看護系大学教育と看護系大学卒業後の新卒看護職員双方が持つ共通課題として認識されているということである。

検討会はさらに、学生自身が実践の場に身を置き、自己対話をしながら成長する際に、実習の場に看護職者のロールモデルが存在することが、学生によい影響を与えると提言し、看護学教育におけるロールモデルの有用性を示している。しかしながら、「ロールモデル」という用語は、日常生活はもとより、看護においても一般的な用語とはいえず、したがって、ロールモデルの示す概念が一意的な共通認識のもとに成立しているかどうかについては大いに疑義がある。本研究の目的は、看護教育におけるロールモデルの概念が、先行研究によってどのように捉えられているのかを明

<sup>1)</sup> 長野県看護大学大学院生、<sup>2)</sup> 長野県看護大学  
2008年10月14日受付  
2009年1月27日受理

らかにすることである。

## 結 果

### 研究方法

医中誌WEBにて「ロールモデル」をキーワードに看護分野における原著論文を検索し、抽出された27編の論文のうち、看護教育に関連する19編、およびこれらの論文が引用している文献のうち、医中誌WEBで検索できなかった6編の計25編を調査対象とした。検索対象年は、医中誌WEBで検索できる最大の範囲、すなわち1983年から2008年とした。なお、検索時期は2008年7月である。調査対象文献は各文献を精読し、内容分析を行い、1) ロールモデルの定義、2) ロールモデルの対象およびロールモデルとなるもの、3) ロールモデルの決定要因、4) ロールモデルの効用という4つの視点から整理した。

### ロールモデルおよびロールモデル行動の定義（表1）

ロールモデルについて研究された過去の文献を精査した結果、「ロールモデル」および「ロールモデル行動」という2つの用語が存在することが判明し、それぞれについて定義が見出された。「ロールモデル」については、Wiseman（1994）は、知覚できる行動で表わせるもの、亀岡ら（2001）は、個々人がその態度や行動に共感し、模倣、同一化・役割学習を試みようとする人物、村上ら（2002）は、人間が社会的役割を果たすために見習いたいと知覚する行動や態度を示す人物としている。一方、「ロールモデル行動」という用語は、中谷ら（2000、2006）、本郷（2000）、松田ら（2000）、舟島ら（2002、2003、2005）の文献に見られるが、「ロールモデル」そのものの定義や説明はなく、ロールモデルの対象が共感・同一化を試

表1 ロールモデルおよびロールモデル行動の定義

	ロールモデル行動およびロールモデル行動の定義
Wiseman (1994)	ロールモデルは知覚できる行動で表わせるもの
本郷ら (1999a)	看護学実習におけるロールモデル行動とは、学生が共感し同一化を試みる看護職者の態度や行動であり、この行動は教員の看護活動・教育活動の中に存在し、学生が観察可能な教員のふるまい
本郷ら (1999b)	看護学実習におけるロールモデル行動とは、学生が共感し同一化を試みる看護職者の態度や行動であり、この行動は教員の看護活動・教育活動の中に存在し、学生が観察可能な教員のふるまい
中谷ら (2000)	ロールモデル行動は看護学教育においては、学生が共感し同一化を試みる教員の行動
本郷 (2000)	ロールモデル行動とは教員の看護活動・教育活動の中に存在し、しかも学生が観察し、共感・同一化を試みる看護職者としての態度や行動
松田ら (2000)	ロールモデル行動とは学生が教育活動を展開する教員を観察し、共感・同一化を試みる教員のふるまい
亀岡ら (2001)	ロールモデルとは個々人がその態度や行動に共感し、模倣、同一化・役割学習を試みようとする人物
舟島ら (2002)	ロールモデル行動とは、学生が観察し、共感し、同一化を試みる教員の行動
村上ら (2002)	ロールモデルは人間が何らかの社会的役割を果たすために見習いたいと知覚する行動や態度を示す人物
志賀ら (2003)	ロールモデリングは人間が専門職者としての態度と行動を修得していくために必要な学習方法であり、学習者が専門職者である他者の態度や行動に共感し、その人との同一化を通して、これらの態度や行動を取り入れていくプロセス
舟島ら (2003)	看護学教員のロールモデル行動とは多様な機能を果たす看護専門職者としての態度を反映し、しかも学生が観察を通して共感、同一化を試みる教員の行動
長谷川 (2005)	看護の実践モデル
舟島ら (2005)	看護師のロールモデル行動とは看護師が共感し同一化を試みる自分以外の看護師の態度や行動であり、この行動は、看護師としての職業活動の中に存在し、専門職者としての態度や行動の修得を促進する
村上 (2006)	ロールモデルは人間が何らかの社会的役割を果たすために見習いたいと知覚する行動や態度を示す人物
中谷ら (2006)	学生個々人が共感し、同一化を試みる教員や看護師の態度や行動
多崎ら (2007)	学習者が専門職者である他者の態度や行動に共感し、その人との同一化を通して態度や行動を取り入れていくプロセス。わざを威光模倣していくこと

みるロールモデルとなりうるものの態度や行動であるとしている。村上ら（2002）、村上（2006）は「ロールモデル」に言及した上で、ロールモデル行動という用語を使用していた。

### ロールモデルおよびロールモデルの対象（表2）

どんな事物がロールモデルおよびロールモデルの対象になっているかについては、「教員」と「看護学生」という組み合わせが12文献で最多であった（Wiseman, 1994；本郷ら, 1999a；本郷ら, 1999b；中谷ら, 2000；中谷ら, 2006；本郷, 2000；松田ら, 2000；亀岡ら, 2001；舟島ら, 2002；舟島ら, 2003；垣上, 2003；長谷川, 2005；村上, 2006）。次に多かったのが、「臨床指導者」と「看護学生」の組み合わせで6文献（松井ら,

2000；志賀ら, 2003；中谷ら, 2006；溝部ら, 2007；渡邊ら, 2007；明神ら, 2008）であり、以上2つの組み合わせで全体の7割を占めた。他に、ロールモデルとして「看護師、なかでも職場の先輩、上司、同僚、職場外の先輩、学生時代の教員」、ロールモデルの対象として「看護師」としているもの（舟島, 2005）や、「指導的、リーダー的役割を担う看護師」、「学生・後輩看護師」としたもの（鳥井ら, 2006；多崎ら, 2007）、「プリセプター」、「新卒看護職員」（澁谷ら, 2007）などが挙げられていた。村上ら（2002）は、ロールモデルの対象を看護学教員とし、ロールモデルとなるものも教員とした研究を行ったが、ロールモデルとなる教員を、上司・同僚の他、恩師や研修会講師とした回答がみられている。中谷ら（2006）も学生のロールモデルを教員・看護師とした研究をして

表2 ロールモデルの対象およびロールモデルとなるもの

	ロールモデルの対象	ロールモデルとなるもの
Wiseman (1994)	学 生	学生は教員をロールモデルとして期待している
本郷ら (1999a)	学 生	教員はロールモデルになりやすい存在
本郷ら (1999b)	学 生	教員はロールモデルになりやすい存在
中谷ら (2000)	学 生	看護学教員
本郷 (2000)	学 生	教員はロールモデルになりやすい存在
松田ら (2000)	学 生	看護学教員
松井ら (2000)	学 生	臨床現場の看護職者
亀岡ら (2001)	学 生	看護学教員
川崎ら (2002)	中堅看護師	モデルとなる看護師はその個人ではなく、その看護師の一部である
舟島ら (2002)	学 生	教 員
村上ら (2002)	看護学教員	上司・同僚のほか、恩師、研修会講師とする回答があった
垣上 (2003)	男子学生	男子学生に対する男性教員
志賀ら (2003)	学 生	臨床指導者の行動
舟島ら (2003)	学 生	看護学教員
長谷川 (2005)	学 生	精神看護学実習におけるインストラクター
舟島 (2005)	看 護 師	看護師、なかでも職場の先輩、職場外の看護師、職場の上司、職場の同僚、学生時代の教員という結果を得た
鳥井ら (2006)	学生・後輩看護師	看護部長に相談し、院内の発達モデルレベル④に該当する看護師。レベル④とはリーダー研修を終了し、臨床実践能力、リーダーシップ能力、教育能力、研究能力において、指導的、リーダー的役割を担うことができる看護師
中谷ら (2006)	学 生	教員・看護師をロールモデルとして調査しているが、研究結果にはロールモデルとする人物に医師、看護助手とする回答があった
村上 (2006)	学 生	効果的な倫理教育のための看護学教員
澁谷ら (2007)	新卒看護職員	プリセプター
多崎ら (2007)	看 護 師	指導的立場の看護師
溝部ら (2007)	学 生	手術室実習における経験豊富な外回り看護師・臨地実習指導者
渡邊ら (2007)	学 生	臨床指導者
明神ら (2008)	学 生	実習指導者

いるが、回答の中には、ロールモデルとする人物を医師、看護助手としたものがあった。また川崎ら(2002)は、中堅看護師らロールモデルの対象は、その人個人ではなく看護師の一部をモデルとして認識していると述べている。ロールモデルの対象は、概して、学生、新卒看護職員、スタッフナースであり、ロールモデルとなるものは、人物の全体か一部かの違いはあるが、教員や医療・看護に携わる同僚または先輩・上司

であるとするものが大半であった。

### ロールモデルの決定要因 (表3)

Wiseman (1994) は、ロールモデルを「他者が知覚できる行動」として表し、28項目の教員の行動を明らかにした。中谷ら(2000)、松田ら(2000)は「学生が自分もあんな風になりたいと思ったときの教員の行動」を質問し、松井ら(2000)も学生が看護

表3 ロールモデルの決定要因

	ロールモデルの決定要因
Wiseman (1994)	学生が知覚した教員のロールモデル行動 28 項目を抽出
中谷ら (2000)	学生が「自分もあんな風になりたいと思ったときの教員の態度や行動」の質問をした結果、学生が看護学教員の行動を観察する中で、〔熱意を持ち質の高い教授活動を志向する行動〕〔社会性の高さを示す行動〕〔熟達した看護実践能力を示す行動〕〔職業活動の発展を志向し続ける行動〕に着目しその教員をロールモデルとしていることを示した
本郷 (2000)	質の高い看護実践を展開する能力が、教員にとって学生のロールモデルとなる存在であるために必要不可欠である。〔看護実践の質〕〔実習指導時間〕〔看護に対する価値づけの程度〕〔学会所属の有無〕〔臨床経験と実習担当科目の一致〕〔大学・大学院在籍の有無〕が看護学実習における教員のロールモデル行動に影響する
松田ら (2000)	学生が「自分もあんな風になりたいと思ったときに教員が示していた行動」として、〔熱意を持ち質の高い教授活動を志向する行動〕〔成熟度の高い社会性を示す行動〕〔熟達した看護実践能力を示す行動〕〔職業活動の発展を志向し続ける行動〕の4側面からなる
松井ら (2000)	学生が看護実践のある場面をみて、その看護師に憧れ、尊敬を抱き、「あんな看護がしてみたい」と思う場面
川崎ら (2002)	中堅看護師は新人の頃から〔よき実践〕〔優れた指導〕〔明確な看護観の保持〕〔円滑な人間関係〕を看護実践の場でモデルとして認識しケアを模倣していると述べている。
垣上 (2003)	男性教員は男子学生に対し、ロールモデル行動を行わなざるを得ない状況といっている。男性教員は教員が自らロールモデルであることを決めている
志賀ら (2003)	あらかじめ臨床指導者を看護場面のロールモデルとしてセッティングした
舟島ら (2003)	ロールモデル行動評価結果より、ロールモデル行動得点の高い教員は、内発的動機により看護学教員となり大学、短期大学に在籍し、しかも豊かな学歴を背景に持ち、現在もなお学会に所属したり、より高次な学位を目指す等の活動を継続し、看護学教員として多様な役割を果たすと共に、職業活動を価値づけ、看護実践能力が高いという特性を持つ可能性が高いとした
長谷川 (2005)	〔インストラクターの実習体験の開示〕〔インストラクターの患者とのかかわり〕を学生がロールモデルとしたことを結果で述べている
舟島ら (2005)	看護師が知覚する看護師のロールモデル行動は〔専門的な知識・技術を活用し、クライアントの個性と人権に配慮しながらあらゆる事態に対処する〕〔問題の本質を見極め、計画的に効率よく独創的な発想により目標の達成を目指す〕〔信念に従い、目標達成に向けてその責務を全うする〕〔看護師・社会人として複数の役割を十分に果たす〕〔看護職・病院・病棟全体の発展を考慮し、その機能の維持・向上に努める〕〔成熟度の高い社会性を示しながら職業活動を展開する〕〔主体的に学習・研究を行い、看護専門職者と指しての発達を志向する〕の7つの特徴を持つ
中谷ら (2006)	学生が知覚する看護師のロールモデル行動として、〔看護職者としての専門性を発揮し質の高い看護を実践する〕〔計画性・効率性・柔軟性をもって仕事に取り組み、目標達成を目指す〕〔複数の役割を果たしながらも看護師としての機能を十分に発揮する〕〔自己の目標・信念に基づき自律した職業活動を展開する〕〔成熟度の高い社会性を示しながら仕事を遂行する〕〔学習環境を調整しながら学生の主体的な学習活動を支援する〕の6側面を抽出した
澁谷ら (2007)	看護学生が職場およびプリセプターに望むことの分析からプリセプターに望む看護師のロールモデル性は、信頼・尊敬できる先輩としての存在と述べた
多崎ら (2007)	糖尿病教育において看護師がロールモデリングしている内容として、〔専門的な患者ケア能力〕〔看護実践の基盤となる能力〕〔チーム育成能力〕を抽出した
明神ら (2008)	実習指導者は実習において学生のロールモデルとしての役割を担う



師の看護実践を見たときにその看護師に憧れ、尊敬を抱き「あんな看護がしてみたい」という場面をロールモデルとして調査している。また澁谷ら（2007）は看護学生がプリセプターに望む看護師のロールモデル性は信頼・尊敬できる先輩としての存在であるとした。さらに、垣上（2003）は、男性教員は男子学生に対してロールモデル行動を行わざるを得ない状況であると述べた。志賀ら（2003）は臨床指導者を看護場面のロールモデルとしてセッティングした実習指導の学習効果について研究している。明神ら（2008）は、実習指導者は実習において学生のロールモデルとしての役割を担うことを前提としている。

#### ロールモデルの効用（表4）

ロールモデルの効果として、看護学生の学習の動機づけ、知識と実践の統合、看護職者としての態度修得や役割価値の認識、看護学実習における不安の軽減を挙げた論文が数多くみられた（本郷ら，1999a；本郷ら，1999b；中谷ら，2000；志賀ら，2003；長谷川ら，2005；村上ら，2006；溝部ら，2007；渡邊ら，2007；明神ら，2008）。松井ら（2000）は、ロールモデルの存在は学生の自己行動変容の効果として期待でき、自己効力感を高められるとしている。

亀岡ら（2001）、川崎ら（2002）、舟島ら（2003，2005）、鳥井ら（2006）、澁谷ら（2007）、多崎ら（2007）は、ロールモデルの存在は看護師が成長して

表4 ロールモデルの効用

	ロールモデルの効用
Wiseman (1994)	ロールモデル行動を真似ても臨床能力が上がるとは限らないと理解した
本郷ら (1999a)	ロールモデル行動が学習の動機づけの強化、職業決定における看護職の選択に影響する
本郷ら (1999b)	ロールモデル行動が学習の動機づけの強化、職業決定における看護職の選択に影響する
中谷ら (2000)	ロールモデル行動を示すことは、学生の学習への動機づけの強化、看護職者としての態度や行動の獲得にとって重要
松井ら (2000)	自己の行動変容の効果が期待でき、実習における学生の自己効力感を高めていける
亀岡ら (2001)	仕事上のロールモデルがいるほうが目標達成度・満足度が高い
川崎ら (2002)	モデルとなる看護師の存在は中堅看護師が成長していく目標設置を具体化させる手段となる
舟島ら (2002)	学生の看護職者としての態度修得にきわめて重要な機能を果たし、教員が示すロールモデル行動が看護基礎教育課程の達成目標にかかわる教授活動に不可欠
村上ら (2002)	ロールモデルを知覚し、その行動に共感、同一化を試みることは、職業に従事する人間の発達に向け必要不可欠な要素
志賀ら (2003)	臨床指導者によるロールモデルは観察した学生が、臨床指導者の行動を具体的な方法として捉え看護の実践をしたいという体験をもつまでの効果的な方法である、また知識と実践の統合を図る助けになる。指導者が意図的にモデルを示すことで、指導者自身の指導意識を高められ、指導効果が上がる
舟島ら (2003)	教員のロールモデル行動は看護専門職者としての態度修得を促進する
長谷川 (2005)	ロールモデルの介入により、学生が主体的な動きができるきっかけとなった
舟島 (2005)	ロールモデル行動の質向上が、看護師全体の専門職者としての態度や行動の修得を促進する
鳥井ら (2006)	役割モデルの存在が看護師の成長と看護観に影響を与える
中谷ら (2006)	ロールモデル行動の観察機会を増加させることは学生の看護専門職者としての態度修得を導き学習目標達成を支援する
村上 (2006)	学生に対し倫理的なロールモデル行動を観察する機会を増加させ、倫理にかかわる効果的な教育に貢献する
澁谷ら (2007)	学生は新卒看護職員となった時に、プリセプターの看護師ロールモデルを参考にしながら専門性を発揮できる能力を発達させていけることを望んでいる
多崎ら (2007)	看護師の専門的な能力育成においてロールモデルが大きな役割を果たす
溝部ら (2007)	外回り看護師の熟達した高度な技術や役割を発揮している場面を目の当たりにすることで、チーム医療において看護師が果たす役割とその価値に気づき、それらを実感できる
渡邊ら (2007)	学生が臨床指導者と行動を共にし、臨床指導者の患者に対するかかわりや援助場面を通じて、看護者として必要な能力を学び得た
明神ら (2008)	ロールモデリング実習において実習後は患者のイメージが肯定的になり不安が軽減した。ロールモデルの効果として患者および指導者との関係作りに有効

いく時の具体的な目標設定の手段となること、専門的な能力の育成において大きな役割があることを述べている。村上ら（2002）は、ロールモデルは職業に従事する人間の発達に向け必要不可欠とした。また、本郷（2000）は「教員は学生のロールモデルとなり、看護職者として望ましい態度の獲得と看護学の学習に対する動機づけを促進する存在であるために、優れた看護実践能力を修得していなければならない」とし、多崎ら（2007）は「経験豊富な指導的立場の看護師は自らがロールモデルとなりうる自負や自覚、および糖尿病患者ケアを実践する現場の風土を自らが醸成していく意識を持ち、自らの実践知を意図的かつ具体的に示すことがのぞまれる」としている。これは教員、臨床指導者、ロールモデルとなる看護師や経験豊富な看護師はロールモデルとしてのあるべき姿を認識することを求められていることを示している。一方、志賀ら（2003）はできすぎるモデルは自己効力を落とす可能性があると述べている。中谷ら（2000）、舟島ら（2002）は、ロールモデル行動は看護基礎教育課程の目標達成にかかわる教授活動や、看護職者としての態度修得に重要であるとする。Wiseman（1994）はロールモデル行動を真似ても臨床能力が上がるとは限らないと述べた。

## 考 察

ロールモデルに関する先行研究を精査した結果、看護教育におけるロールモデルは、1) 行動で知覚できる、2) 人物である、3) 行動を間近で見られる程度の身近な存在である、4) 生存している、5) 目上である、6) 看護関係者であることが共通の特徴もしくは条件とされ、ロールモデルの対象は看護学生や新卒看護師であった。多くの当該研究が、以上の枠組みを前提として研究デザインを構築し、議論を展開していた。また、この枠組みにおいて、ロールモデルはロールモデルの対象によって選択されているのではなく、研究者や教育者によって意図的に決定されていることも判明した。以下にこれらの点について考察する。

## 社会におけるロールモデルの概念

「ロールモデル」を辞書で引いてみる。代表的な日本語の辞書であり、2008年に発刊されたばかりの広辞苑（2008）や、類義語辞典としては国内最大の日本語大シソーラス類語検索大辞典（2003）には収載されていない。カタカナとしての「ロールモデル」は、まだ日本語として一般的ではないことが窺える。「role model」を英和辞典で調べると、ジーニアス英和辞典（2001）には「模範となるもの。理想の姿。」と記載されている。ここで示される意味において、ロールモデルは必ずしも人物ではないことがわかる。英辞郎（2005）には「(成功・実績などによって) 他人の手本となる人物、お手本、模範になる人、役割モデル・Shigeo Nagashima is a role model for young Japanese baseball players. 長嶋茂雄は若い野球選手にとって模範的な人だ。」などの意味や用例が掲載されており、人物と規定されているものの、必ずしも身近である必要はない。

他の学問分野、たとえば心理学分野の研究では、「個人の発達の欲求や目標を基にした理想自己あるいは可能自己を表わす人物」（及川ら、2006）と定義されている。この定義で重要なのは、ロールモデルは、基準や資格によってなるものでも、立候補や指名によってなるものでもなく、ロールモデルの対象によってはじめてロールモデルとして認められるということである。一般書ではたとえば、齋藤ら（2008）は、ロールモデルであるための条件として、「存在のありよう」に関して「あこがれるかどうか」が重要であると述べる。

株式会社バンダイが2004年に行った「憧れのスポーツ選手」調査（バンダイ、2004）によると、松井秀喜が男女総合1位、2位はイチローであった。子どもにしてみれば、必ずしも野球人としての先輩というわけではなく、ましてや日常的に接するわけでもないにもかかわらず、メディアを通して知り得た彼らのありようをロールモデルとして認識しているわけである。

ちなみに、齋藤は自分のロールモデルをナポレオン、嘉納治五郎、ゲーテであると述べ、梅田は今北純一、エスター・ダイソン、村上春樹の3人を挙げている

(齋藤ら, 2008). 齋藤のロールモデルはすでに生存しておらず, 当然のことながら接したことのある身近な人物ではない. 一方, 梅田のロールモデルは実在し今なお生存していて, 自身が望めば接触可能な年齢的にも近い人物である. このようにロールモデルの設定様式は両者で異なるが共通点もある. それは, ロールモデルが個人個人の嗜好によって決定されている点, 能力やスケールというよりはむしろ「存在のありよう」に惹かれているという点, さらに両氏の専門分野の先達に限らないという点である.

### 看護におけるロールモデル観

前述したように, 看護分野以外でのロールモデルの用法について調べると, ロールモデルはロールモデルを利用するユーザーが決めるのであって, 外部から規定する性格のものではない. 「私のロールモデルはあなたである」と他人に対して思うことは, 個人の自由な意思であって, 決して他人から強制されたり, 選択肢の中から選んだりする類いのものではない. つまり, 看護教育における多くの研究者らの, ロールモデルは教員や医療・看護に携わる同僚または先輩・上司がなるのだという考えは, 世間一般のロールモデル観とは異なる可能性が高い. また, 「ロールモデル」および「ロールモデル行動」で使用されている「ロールモデル」という用語はいずれの文献においても同義に扱われていた. つまり, 看護教育系の論文で使用されている「ロールモデル」という用語は, 辞書あるいは一般書で示される用法とは異なるということである.

看護職者は専門職者であるという前提から, 舟島ら (2005) は, 「看護師のロールモデル行動とは」として, 看護職者のロールモデルは看護職者の職業活動に存在することを示している. 看護教育におけるロールモデルに関する先行研究では, 看護職者は専門職であるがゆえにその道の専門家の模倣を前提としている. これは伝統芸道の教育観に近いものがある. 歌舞伎や茶道など日本古来の伝統芸道の世界で師匠と弟子の関係性を持って, 専門は専門家に学ぶスタイルがとられている. これについてはさまざまな伝統芸道の領域において特に厳密なカリキュラムが組んであるわけでも, 正面切って教わるものでもなく, 「聞いて覚える」

「見て覚える」こと, つまり「模倣」が教育の中心となっている (生田, 2007) という.

翻って, 看護という専門教育において伝統芸道のような模倣が重要だとするならば, 1) 専門家の模倣をすることで昨今の看護教育の重要課題である新卒看護職員の実践能力は上がるであろうか. 2) 一般社会においては個人に対するさまざまな人物がロールモデルになりえるのに, 看護職者は看護専門職者をロールモデルとしなければならないのかという2つの疑問が生じる.

看護は専門職といわれる以上, 見てとれる技術を他ならぬ看護職者に学ぶことは理にかなっているであろう. またBenner (2001) は, 臨床実践の多様性と例外は, 教科書では到底説明できないものだが, 経験を積んだ看護師にとっては, 似たような状況や異なる状況が体験の蓄えになり, 新米看護師にとっては, この実演こそがきわめて重要だと述べている. つまり, 知識を獲得するということは, ロールモデルの存在や見てとれる技術という断片を集めたものではなく, 状況を体験するという経験の積み重ねであることを示唆しているといえる.

体験を通して教えることに関して, 「我々が外見的特徴を人に教えることができるのは, 教師が示そうとしていることの意味を生徒がつかもうとして努力する知的協力が生徒の側に期待できる限りににおいてである.」とPolanyi (1966) が述べるように, 教師から生徒への一方的な教授ではなく, 共にその状況に参加することの重要性が示されている. つまり, 状況を共有する人間が協力関係をもって体験すること, 知の共有こそが重要なのである. したがって専門職者の見える部分の模倣をしても, さまざまな状況に対応するための実践能力にはなりえない可能性があるということになる. 舟島ら (2002), 中谷ら (2006) の「学生の態度修得に重要な機能」, 志賀ら (2003) の「自分も行ってみたいという期待を持ち, 知識と実践の統合を図る助け」, 澁谷ら (2007), 多崎ら (2007), 渡邊ら (2007) の「専門的な能力育成」をロールモデルの効用として挙げているが, 上述した先人の考え方を適用すれば, 「ロールモデル行動を真似ても臨床能力が上がるとは限らない (Wiseman, 1994)」という考え



方のほうが的確なように思える。

これに関連して佐伯（2007）は、学習は参加であるとしたうえで、相手が「やろうとしている」世界に注目する、共同注視の重要性を説いている。つまり、看護学教育の在り方に関する検討会の報告の「優れた看護が実践されている状況や卓越した看護職者のモデルの存在そのものが教育となる」、すなわち、看護実践のロールモデルと看護職者のロールモデルに教育の効果を期待するのであれば、「〇〇ができる」というような行動目標を設定して、その目標が達成されたか否かを求めるのではなく、「わかっている」という心的状態を目指すことを前提として、看護学生や新人看護職者らが状況に参加しロールモデルを利用しながらその場その時の体験や、その場面の看護職者の思考過程を明らかにし共有することから生まれる知の生成を教育の効果として認識していくことが重要と思われる。

看護職者のロールモデルは看護専門職者でなければならないのかという問いについて考察すると、Polanyi（1966）は、知ることは経験を能動的に形成・統合することで可能となる「知的に知る（knowing what）」ことと、「実践的に知る（knowing how）」ことの2つが存在して「知る」としている。knowing howに関しては、状況を共有する看護職者から得られるところが大きいかもしれない。しかしながらknowing whatに関しては、看護専門職者でなくファシリテーターでも可能だし、齋藤（2008）の言う「ロールモデルは自分のエネルギーの源泉となる消費財である」という論に乗じると、ロールモデルは自分のためになる存在であればなんでもよいとも言えるわけである。技術的側面と認知的側面を持つ暗黙知が知識の多くであるとする実践の科学が看護であるならば、技術的側面と同様に認知的側面をどう培っていくかも重要な課題である。

看護学教育の在り方に関する検討会報告（文部科学省、2004）で、教養教育と看護実践能力の育成について「看護学を志す学生にとっては、看護という専門職業分野の中で、生涯に亘り自己の生き方を追求するために、自己を確立すること、自己の存在の原点をさぐる事が大事である。」と、その重要性が論じられており、自己確立や自己追究を看護専門教育だけに委

ねるのではなく、教養教育にも人間形成の基盤を広く求めていることが伺える。しかしながら、多くの看護系研究者が、ロールモデルとその対象を予め設定して研究を行っており、看護の範囲に矮小化して捉えているのである。

看護学教育が自己確立と自己追究を必要としていることや、知識の一側面を「知的に・実践的に」知るのであれば、個人にとって過去の人物であっても、身近でなくても、目上でなくても、何がロールモデルであってもよい。また、何をロールモデルとするかどうかについては、前述した齋藤氏や梅田氏、さらに小学生が示しているとおりに他者に完全に依存している。ナポレオンが齋藤氏のロールモデルになろうとしたわけでもなく、松井選手がある10歳の男の子のロールモデルになろうとしているわけでもない。にもかかわらず、看護の先行研究の多くは、学生には看護学教員、男子学生には男性教員、新卒看護職員にはプリセプターというように、ロールモデルの決定者は研究者でありロールモデル側が持つという前提で論じられている。

誰かがロールモデルとなりえるか否かはロールモデル側が決めることではなく、「ロールモデルを必要とする人物」に依存する問題である。しかし、ロールモデルへの期待や、ロールモデル行動に関する自己評価尺度が研究されていることを考慮すると、看護教育におけるロールモデルという概念は、学習者や後進のためというよりはむしろ、先輩看護師らの能力開発のために利用されている懸念がある。少し乱暴な言い方をすれば、研究者の作ったロールモデルという偶像に看護師たちが近づくようにしなさい、という思想である。人間は生涯成長するという点においては、同じ人間として当然ロールモデル自身も成長することを求められるが、それはロールモデルの文脈ではない。そもそも「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告は学生自身の成長をねらいとしたものである。ロールモデル行動を自己評価のツールとした先行研究は、自らをロールモデルと名乗る人物のための教育手段にすり替えられており、対象者の目標設定や成長発達に重点を置くロールモデルのあり方との矛盾を感じざるを得ない。



## 結 論

現在の看護教育におけるロールモデルは1) 行動で知覚できる, 2) 人物である, 3) その人物は行動をモニターできる程度の身近な人物である, 4) 生存している, 5) 目上である, 6) 看護関係者であることが規定され, 社会におけるロールモデルの捉え方と比較すると狭い範囲の存在として捉えられていることが示唆された. このように規定されたロールモデルは, 学生や新卒看護職員が知覚できる技術を模倣することにおいては活用可能である. しかし, 知識の多くを暗黙知とする看護においては状況に即した実践能力にはならない. また, 「看護学教育の在り方に関する検討会」ではロールモデルは学生や新卒看護職員らのために活用されるものとしてその効果に期待しているのであるが, ロールモデルの決定権は完全他者依存的問題であるにも関わらず, 実際はロールモデルとなりうるものが持っている. これらから, 現在の看護教育では, ロールモデルはロールモデルを名乗る人物らの教育手段としてすり替えられている現状が明らかにされた.

## 文 献

バンダイ広報チーム (2004) : バンダイ子どもアンケートレポートVol.107.

Benner P. (2001) /井部俊子監訳 (2005) : ベナー看護論新訳版ー初心者から達人へ, 医学書院, 東京.

Electronic Dictionary Project監修 (2005) : 英辞郎第2版, 株式会社アルク, 東京.

舟島なをみ, 松田安弘, 山下暢子, 吉富美佐江 (2005) : 看護師が知覚する看護師のロールモデル行動, 日本看護学会誌, 14 (2), 40-50.

舟島なをみ, 定廣和香子 (2003) : 看護学教育における自己評価の意義と課題ー教授活動に焦点を当ててー, 看護展望, 28 (5), 29-534.

舟島なをみ, 定廣和香子, 亀岡智美, 鈴木美和 (2002) : 看護教員ロールモデル行動自己評価尺度の開発ー質的帰納的研究成果を基盤としてー, 千葉大学看護学

部紀要, 24, 9-14.

舟島なをみ, 定廣和香子, 松田安弘 (2003) : 看護学教員のロールモデル行動に関する研究ー教員の特性と教員自身が評価したロールモデル行動の質との関係ー, 千葉大学看護学部紀要, 25, 17-25.

長谷川博亮, 伊藤幹佳, 伊藤ひろ子 (2005) : 精神看護実習におけるインストラクターの支援ー対人関係理論を基盤にした学びの展開ー, 宮城大学看護学部紀要, 8 (1), 9-87.

本郷久美子 (2000) : 教員の特性が看護学実習におけるロールモデル行動に及ぼす影響, 看護教育学研究, 9 (2), 6.

本郷久美子, 舟島なをみ, 杉森みど里 (1999a) : 看護学実習における教員のロールモデル行動に関する研究, 看護教育学研究, 8 (1), 5-28.

本郷久美子, 舟島なをみ, 杉森みど里 (1999b) : 看護学実習における教員のロールモデル行動に関わる要因, 日本看護科学学会学術集会講演集, 18, 276-277.

生田久美子 (2007) : 「わざ」から知る, 東京大学出版会, 東京.

垣上正裕 (2003) : 看護学教育における男性教員の経験の特徴と課題, 神奈川県立看護教育大学校, 看護教育研究集録, 28, 94-100.

亀岡智美, 定廣和香子, 舟島なをみ (2001) : 目標達成度と満足度が高い看護婦・士の特性の探求ーキング目標達成理論を基盤にしてー, 看護教育学研究, 10 (1), 9-42.

川崎敬子 (2002) : モデルとなる看護師の存在様式と中堅看護師に与えた影響, 日本看護学会論文集 (看護管理), 33, 82-84.

小西 友七, 南出 康世 (2001) : ジーニアス英和辞典第3版, 大修館書店, 東京.

松田安弘, 本郷久美子, 中谷啓子, 三浦弘恵, ほか 5 名 (2000) : 看護学教員のロールモデル行動に関する研究, 千葉看護学会誌, 6 (2), 1-8.

松井英俊, 佐藤敦子 (2000) : 臨地実習でロールモデルとなる看護婦・看護士から影響を受けた学生の関心, 日本看護学会論文集 (看護教育), 31, 137-139.

- 溝部佳代, 鷺見尚己, 武藤眞佐子 (2007) : 周手術期看護実習における手術室看護の有効性－学生の手術質看護に関する学びと態度の変化より－, 看護総合科学研究会誌, 10 (1), 3-13.
- 文部科学省 (平成14年3月26日付) : 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて－看護学教育の在り方に関する検討会報告, 平成21年1月30日,  
[http://www.mext.go.jp/\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm](http://www.mext.go.jp/_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm).
- 文部科学省 (平成16年3月26日付) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標－看護学教育の在り方に関する検討会報告, 平成21年1月30日,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/15/toushin/04032601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/15/toushin/04032601.htm).
- 村上みち子 (2006) : いま, 考えてほしい倫理の問題 看護学教員の倫理的行動, 臨床看護, 32 (5), 777-782.
- 村上みち子, 舟島なをみ (2002) : 看護学教員のロールモデル行動に関する研究－ファカルティ・ディベロップメントの指標の探求－, 看護研究, 35 (6), 35-46.
- 村上成明 (2006) : 看護実践の知的伝授のプロセスにみられる暗黙知の伝授の有用性の検討－看護管理者の知的伝授体験より－, 日本看護管理学会誌, 9 (2), 50-57.
- 明神一浩, 一ノ山隆司, 上野栄一, 川野雅資 (2008) : 実習指導者がロールモデルを示す効果の検討, 日本看護研究学会雑誌, 31 (3), 175.
- 中谷啓子, 本郷久美子, 松田安弘, 舟島なをみ (2006) : 学生が知覚する看護師のロールモデル行動に関する研究, 東海大学短期大学紀要, 40, 13-21.
- 中谷啓子, 松田安弘, 廣田登志子, 三浦弘恵, ほか5名 (2000) : 学生が知覚している看護学教員のロールモデル行動に関する研究, 看護教育学研究9 (2), 8-9.
- 新村出 (2008) : 広辞苑第6版, 岩波書店, 東京.
- 及川千都子・桜井茂男 (2006) : 役割モデルと制御焦点が内発的動機づけに与える影響, 筑波心理学研究 (32), 73-82.
- Polanyi M. (1966) / 佐藤敬三訳 (1980) : 暗黙知の次元・言語から非言語へ, 紀伊國屋書店, 東京.
- 佐伯胖 (2007) : 「わかり方」の探求－思索と行動の原点－, 小学館, 東京.
- 齋藤孝・梅田望夫 (2008) : 私塾のすすめ－ここから創造が生まれる, 筑摩書房, 東京.
- 社団法人日本看護協会 (2005) : 2004年「新卒看護職員の早期離職等実態調査」.
- 社団法人日本看護協会 (2006) : 2005年「病院における看護職員需給状況調査」結果概要.
- 澁谷恵子, 三上智子 (2007) : 新卒看護職員の早期離職防止に関する一考察－看護学生の職場およびブリセプターに望むことの分析から－, 名寄市立大学紀要, 1, 23-29.
- 志賀厚子, 池本滋子 (2003) : 小児看護学実習におけるロールモデルによる指導, 看護展望, 28 (10), 1172-1177.
- 多崎恵子, 稲垣美智子, 松井希代子, 村角直子 (2007) : 看護師の糖尿病教育におけるロールモデルの存在と実践意欲の実態, 金沢大学つま保健学会誌, 31 (1), 61-69.
- 鳥井美佐, 三上れつ (2006) : 看護学生・後輩看護師のモデルとなる看護師の看護観と体験に関する研究, 日本看護学会論文集 (看護管理), 37, 302-304.
- 渡邊知佳子, 野崎真奈美, 横屋智明, 田中美穂, ほか1名 (2007) : 基礎看護学実習(臨)を体験した学生の初めての学び, 東邦大学医学部看護学科紀要, 21, 18-25.
- Wiseman R.F. (1994) : Role Model Behaviors in the Clinical Setting, Journal of Nursing Education, 33 (9), 405-410.
- 山口翼 (2003) : 日本語第シソーラス類語検索大辞典, 大修館書店, 東京.

【Material】

# The concept of “role model” shared among literatures related to nursing education in Japan

Mio Ota<sup>1)</sup>, Jukai Maeda<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Graduate Student of Nagano College of Nursing,

<sup>2)</sup> Nagano College of Nursing

**【Abstract】** In Japan, the term “role model” is used in the official report issued by an advisory panel of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and the report showed the usefulness of role model in nursing education. Unfortunately, however, the term “role model” is neither spread well nor shared common perceptions among nurses. As a result of reviewing past literatures related to nursing education, the role model in nursing included such characteristics as 1) human beings, 2) alive, 3) people around, 4) elders and betters, and 5) nurses. Moreover, it was proved that choosers of role model were not nursing students nor new graduate nurses, but educators and researchers in nursing. It was suggested that the role model in the field of nursing education was thought as means to improve senior nurses' performance rather than to develop nursing students and fresh nurses.

**Keywords:** role model, nursing education, concept

---

太田美緒

〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694

TEL : 0265-81-5100, FAX : 0265-81-1256

Mio Ota

1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan

e-mail: ns087005@nagano-nurs.com